

寄贈資料			2024.1.1～12.31
2024			
2.20	中野小夜子様:中尾ゼミ機関誌『ほうげん』16冊、他22点	10. 2	永田文城様:九州六大学野球連盟表彰状、他1点
3.19	吉田雅俊様:1956年大学卒業記念アルバム、他1点	10.26	原耕作様:テニス部100周年記念誌
5. 9	立石肇様:「第30回記念三大学対抗職員野球大会パンフレット」、他3点	11.15	佃文子様:「GUIDE BOOK」学術文化会'68、他5点
5.15	的場睦裕様:1987年大学卒業記念アルバム	11.19	古野たづ子様:『西新町クロニクル』
6.11	安部健一様:「條猪之彦関係ファイル」、他2点	12. 6	山縣和彦様:大学卒業証書、他35点
6.11	ベンチャール会様:『中村哲 思索と行動』(下)	12.16	益村岳浩様:ワンダフォーゲル部部誌『路』、他27点
9.24	吉田雅俊様:旧制高等学部、旧制中学部関係写真、他22点		

活動記録			2024.1.1～12.31
2024			
1.16	複写:大学学生食堂画像、他3点	9. 2	移管:クリスチャン新聞、他8点
1.19	複写:E.B.ドージャー伝画像、他1点	9.13	閲覧:1917年当時の西新町付近の地図
1.30	照会:C.K.ドージャーの遺訓について	9.24	移管:学院創立100周年記念事業関係資料144点
2.20	複写:大学ラグビー部80年史、他1点	9.24	閲覧:大名町土地・警固町ボールデン住宅地関係資料
2.20	移管:聖書植物園に関するファイル、他1点	9.25	貸出:「西南学院旧高校講堂 建物調査及び耐震診断報告書」
2.22	発行:西南学院史資料センター通信「一粒の麦」No.7	9.25	閲覧:西南学院旧講堂(赤レンガチャペル)関係資料、他4点
2.26	複写:倉光卯平先生画像、他4点	10. 1	閲覧:『西南学院百年史』
2.26	閲覧:大学卒業記念アルバム1979	10. 9	閲覧:大学バスケットボール部創部90周年記念誌、他6点
3. 1	複写:「就職のおしり」	10.18	複写:西南学院大学博物館画像
3. 1	展示:「西南学院の女性宣教師たち-学院の礎を築いた女性たち」(-12/20)	10.18	閲覧:尾崎容子追悼記念文集『みちのり』
3. 7	照会:尾崎源六と尾崎主一の関係について	10.23	閲覧:国際関係アルバム、他8点
3.11	閲覧:「日本バプテスト連盟50年史」、他1点	10.24	会議:第2回学院史資料センター運営委員会
3.19	発行:『西南学院アーカイヴズ』第2号	11. 5	閲覧:「西南学院一覧」、他9点
4. 2	閲覧:吉原勝先生関係スクラップ	11. 7	貸出:「西南学院旧本館・講堂改修工事報告書」、他2点
4. 9	会議:第1回バプテスト資料保存・運営委員会	11.12	会議:第2回アーカイヴズ編集委員会
4.11	会議:第1回アーカイヴズ編集委員会	11.12	移管:讚美歌自動演奏機ヒムプレイヤー2台
4.18	会議:第1回学院史資料センター運営委員会	11.13	複写:『あかしびと』、他3点
5. 1	閲覧:複製CD「祝卒業 西南よ、キリストに忠実なれ 1969-1973」	11.14	閲覧:『まいづる創立100年誌』、他3点
5. 7	閲覧:『河村幹雄博士遺稿』、他2点	11.16	貸出:西南学院大学碧波寮表札
5.17	照会:『西南』第12号、他10点	11.18	会議:第2回学院史講義運営委員会(Webex)
5.21	研修:全国大学史資料協議会西日本部会(大阪工業大学)	11.20	閲覧:西南学院大学管弦楽団関係ファイル、他5点
7. 2	移管:神学部関係写真アルバム、他48点	11.21	貸出:大学チャペル講話録音テープ11本
7.22	研修:全国大学史資料協議会西日本部会(関西大学)	11.28	複写:西新商店街のリヤカー部隊の画像
7.23	閲覧:柳原舜祐先生主筆の月刊誌「まこと」、他11点	11.28	複写:西新キャンパス航空写真
7.30	会議:第2回バプテスト資料保存・運営委員会	12. 3	会議:第3回バプテスト資料保存・運営委員会
7.31	閲覧:「宗教局報告」	12. 6	複写:福永陽一郎氏寄贈楽譜
8. 2	移管:大学入学手続書類、他174点	12.16	閲覧:大学卒業記念アルバム1983
8.21	貸出:つるべ渡し、つい立て	12.18	貸出:学院創立50周年記念式典録音CD(No.1,2)
8.22	会議:第1回学院史講義運営委員会(Webex)	12.26	移管:大学旧図書館スナップ写真
8.22	閲覧:ギャロット資料ファイル、他13点		

2025年度企画展:「西南学院の象徴、再び」	
西南学院では、学院創立者C.K.ドージャーの遺訓「西南よ、キリストに忠実なれ」が建学の精神とされ、今日まで脈々と継承されている。校名や校歌、校章、スクールカラーなど、学院にまつわる一つひとつの事柄は、建学の精神の思いが込められた象徴であり、次世代にも継承されるべき事象の数々である。西南学院の歴史の背景には宣教師をはじめ、学院関係者の様々な願いと祈りが刻まれており、建学の精神を標榜してきた歴史や人物を紹介する。 本企画展は、2017年度の企画展「西南学院の象徴(シンボル)」のリバイバル開催である。学院史資料センターがこれまでに紹介してきた数々の資料に加え、企画展期間中には展示資料の入れ替えにより、新たな写真や書籍等の公開も計画中である。	
	
2017年度の企画展の様子	
会 期: 2025年3月3日(月)～12月19日(金)	休館日: 日曜日、5月3日(土)～6日(火)、8月11日(月)～16日(土)
時 間: 9時00分～17時00分(最終入室は16時30分)	主 催: 西南学院史資料センター
会 場: 西南学院百年館(松緑館)1階企画展示室	入場料: 無料

学院史資料センター運営委員

委員長：今井 尚生(学院史資料センター長、院長、学長)

委員：黒木 重雄(大学図書館長)

片山 隆裕(大学博物館長)

須藤 伊知郎(大学神学部教授)

西 輝久(中学校・高等学校副校長)

松浦 千絵(小学校常勤講師)

永尾 雄治(舞鶴幼稚園教諭)

太田 翠(早緑子供の園主任保育士)

大坪 靖(総合企画部長)

吉田 直史(社会連携課長)

学院史資料センター事務局

山縣 和彦、世戸口 尚英、中山 直美

編集後記

今回紹介した男声、女声、混声合唱曲の楽譜や学術雑誌的な機関誌をはじめ、学院史資料センターには多彩な資料が寄贈され、大切に保管されている。かかる資料の存在が内外に周知される機会は少ないが、今後の教育・研究活動をはじめ、様々な分野での活用が望まれている。

私事で恐縮ながら、来たる3月31日をもって西南学院を選択定年退職することになった。4年間の学業に加え、38年間の職歴の最後に西南学院の様々な史実と向き合う機会を与えていただいたことは幸いであった。お世話になった多くの方々に感謝しつつ、筆を置きたい。(和)

西南学院史資料センター通信

一粒の麦

Seinan Gakuin Archives Newsletter



福永陽一郎氏から寄贈を受けた楽譜

Contents

・学院史資料センター所蔵資料の紹介〈7〉	2
福永陽一郎氏寄贈の楽譜	
－男声合唱界の貴重な資料	
・学院史資料センター所蔵資料の紹介〈8〉	3
先輩と後輩をつなぐ『ほうげん』	
－中尾英俊ゼミの学術雑誌的機関誌	
・2025年度企画展	4
「西南学院の象徴、再び」	
・寄贈資料・活動記録	4

福永陽一郎氏寄贈の楽譜 ― 男声合唱界の貴重な資料

◇約70箱の膨大な資料

2017年にグリークラブOB会から、「長年グリークラブの指導をされていた音楽家であり、西南学院の卒業生でもある福永陽一郎氏の所蔵の楽譜や資料を寄贈したいが、その前に膨大な資料の量なので、それを整理する場所を提供してもらえよう協力してほしい」との申し出があった。もともとこれらの資料は、福永氏のご遺族から整理・分類して西南学院に寄贈するよう、グリークラブOB会へ委託されていたものであった。そこで西南学院では、西南学院史資料センターと協議し、西南学院百年館3階の会議室を資料整理のため、グリークラブOB会に提供することになった。

同OB会が整理する前の資料は、段ボール約70箱に詰まった状態の膨大な量だったので、まずそれを本や写真などの資料と楽譜に分けることから始めた。さらに男声、女声、混声、また日本で出版された楽譜とそれ以外などに分けた上で合唱組曲のタイトル、曲名、作詞者、作曲者、編曲者、出版年、出版社などで分類し、整理する必要があった。そうして分類された楽譜をパソコンに手分けしてデータ入力を行うなど、地道に作業を続けていった。

その間、グリークラブ創立100周年を記念してアクロス福岡で開催された「グリークラブフェスティバル」や百年館企画展示室で行われた「グリークラブ百年の歩み展」などのイベントもあり、また、2019年末からの新型コロナウイルス感染症の流行もあって作業がはかどらず、次第に後ろにずれ込むのもやむを得ないことであった。こうしてようやく楽譜の整理が終わり、合唱曲の112タイトル、414曲のデータの入力が完了し、2023年10月に学院史資料センターに寄贈された。

◇福永陽一郎氏の功績

福永陽一郎氏は、1926年に兵庫県神戸市に生まれ、関西学院中学部、西南学院中学部、西南学院高等学部を経て、東京音楽学校（現・東京芸術大学）ピアノ科に入学。1948年に音大を中退して近衛秀麿の内弟子となり、指揮法、作曲法、管弦楽法を学んだ。その後、1950年に本学神学部に入學したが、翌年、再び上京し、藤原歌劇団に入団した。日本で活躍した舞台音楽とオペラの作曲者・指揮者であるマンフレート・グルリット氏に指導を受け、オペラ演奏法を学んだ。

指揮者としては、合唱曲やオペラなど中心に活躍したが、特に男声合唱に力を注ぎ、1952年には日本初のプロ男声合唱団「東京コリアーズ」を声楽家の畑中良輔氏とともに設立した。また、同志社グリークラブや早稲田大学グリークラブなど学生コーラスの指導にあたり、1959年から1989年まで西南学院グリークラブの指揮者として定期演奏会を成功に導いている。特に1979年には、グリークラブ創立60周年記念特別演奏会として、郵便貯金会館メルパルクホール福岡で同氏の指揮により、当日の演奏をLPレコードに録音している。



長年グリークラブの指導にあたった福永陽一郎氏

さらに編曲者としては、男声合唱の分野のレパートリーの拡大に尽力し、オペラや黒人霊歌、映画音楽、ポピュラーソング、民謡などを幅広く手掛けた。

晩年は、人工透析を週に3回行うなど闘病生活を送りながらも音楽活動を続けていたが、1990年2月に63歳でこの世を去った。ちなみに福永氏の没後の1992年10月に財団法人藤沢市芸術文化振興財団が設立され、藤沢オペラコンクールを開催しているが、その優勝者には同氏の名前を冠した「福永陽一郎賞」が贈られている。

◇幅広く利用を

福永氏は生前家族に対し、「自分に万が一のことがあった時には、音楽に関する資料や楽譜はすべて西南学院に寄贈してほしい」と伝えてあったという。「西南学院には思い入れがあったと思います。『グリークラブの学生たちをヨーロッパ演奏旅行に連れて行きたい』と福永先生が言われた背景には、九州にあって西南学院グリークラブを大きく成長させたいとの思いが込められていたように感じました。」と同OB会で楽譜整理に当たっていた藤寿さん（1986年卒）が語ってくれた。そして没後、その言葉通りに膨大な楽譜や書類などが本学院に寄贈されることになった。

福永氏が長年携わってきたオペラ関係の書籍や黒人霊歌に関する楽譜等は、同氏がライフワークとして力を注いただけに男声合唱界にとっても貴重であり、直筆楽譜やいわゆる「書き込み」は音楽家としての福永陽一郎を知る上で興味深く、有意義な資料である。

福永氏寄贈の楽譜は、著作権等の問題があるため外部に貸し出すことは難しく、同OB会でも頭を悩ませているところである。

「これらの楽譜や資料を西南学院だけのものとはせず、できる限り全国の合唱音楽愛好家と共有化したい」と同OB会顧問の河野正海さん（1963年卒）が語られるように、これらの資料・楽譜が今後広く活用されることが望まれる。

寄贈された楽譜タイトル一覧

Negro Spirituals
黒人霊歌・NEGRO SPIRITUALS(1964)
男声合唱のための東北民謡集
日本の働く者のうた
Oh, what a beautiful morning
Western Songs
Home, Sweet Home
ジブシーの歌
Rolling Home!
Homeward Bound
外山節
信濃追分
Huit Chansons Françaises
Rhapsody in Blue
近代フランス器楽曲に拠る男声合唱集
心さわぐ青春の歌
モスクワ郊外の夕べ
Hernando's Hideaway
東京コリアーズ合唱曲集1
東京コリアーズ合唱曲集2
More
Chanson de Paris
日本の歌

ジャパン・ポップス
Listen to the Lamb
DOSHISHA GLEE POPULER SERIES
男声合唱組曲「沙羅」
Ein Liebesliederbuch
Die Tageszeiten
緋色のサラファン
こんびらふねふね
労働革命歌
The Godfather
ゴッドファーザー愛のテーマ
Love Thema from "THE GODFATHER"
Sea Shanty
White Christmas
Cantique de Noël("O Holy night")
三木稔「レイクエム」(オケ版)
枯れ木と太陽の歌
四国の子守唄
My Fair Lady
おかあさん
花の街
中国地方の子守唄ほか
日本民謡曲集

日本の笛
Ave Verum Corpus
Zigeunerlieder
Oh! Susanna
Sweet and Low
Moon River
Roch Lomond
Tannhäuser
Christmas Fantasy
あけぼの歌
トロイカ
Born Free
Dream
ララのテーマ
Some Enchanted Evening(魅惑の宵)
Chansonnier Français
Chansons Françaises
Chansonnier Français
鯉の墓
おお、ブレネリ
メリーポピンズ
涙から明日へ
Jesus Christ Superstar

多田武彦「男声合唱曲集」
多田武彦「男声合唱曲集2」
多田武彦「男声合唱曲集3」
中勘助の詩から
ことばあそびうた II
柳河風俗詩
海の構図
同志社グリークラブ愛唱歌
雪明かりの路
Messe Solennelle Saint Cecilia
Londonderry Air
Danse espagnole
屋根の上のヴァイオリン弾き
さすう若人の歌
信濃追分
無名戦士
学生王子
The Wizard of Oz
Begin the Beguine
Night and Day
WARUM
Steal Away to Jesus
Westside Story

The New Moon
The Sound of Music(1)
The Sound of Music(2)
Mass in honor of Saint Sebastian
The Sound of Silence
Scarborough Fair
Mrs. Robinson
El condor Pasa
Bridge Over Trouble Water
六つの男声合唱曲～十の詩曲より
Zigeunerumelodien(ジブシーの歌)
White Christmas
Japanese Folk Songs
幼年連携
にほんのうた
South Pacific
The Impossible Dream
Man of La Mancha
Let us Break Bread Together
Ich bete an die Macht der Liebe

青字は直筆の楽譜

先輩と後輩をつなぐ『ほうげん』 ― 中尾英俊ゼミの学術雑誌的機関誌

◇『ほうげん』の創刊

昨年5月、本学法学部中尾英俊ゼミOB・OGで構成される「ほうげん会」の事務局の中野小夜子さん(77期)より、機関誌『ほうげん』(創刊号～16号最終号まで)や『ほうげん復刊』(創刊号から13号最終号まで)、『ほうげんかわら版』(創刊号から9号)の38冊の寄贈を受けた。

この『ほうげん』は、法学部第1期生(1971年3月卒業)の中尾ゼミの卒業生が中心となって法社会学研究会を結成し、その活動を記録に残そうということで、1976年に機関誌『ほうげん』が誕生した。その内容は、中尾英俊ゼミの学生の研究調査報告を掲載する学術雑誌的な性格とともに、ゼミの先輩後輩のコミュニケーションを図るという同門誌的な性格を併せもって創刊された。同誌の創刊以降、法社会学研究会の会員は在學生に限り、卒業生は原則として「ほうげん会」の会員とする、ということになった。

◇法社会学と『ほうげん』の役割

もともと法社会学は、社会現象としての「法」を認識し、その社会法則を研究する学問で、生きた社会現象の中に法源を求めなければならず、農村や山村、漁村などにフィールドワークに出かけるなど、足で学ぶ学問と言える。そうして現地の人がとから学んだことを記録し、まとめ、公表しなければならないが、報告書を発行するにはいくつかの制約があり、学生にはなかなかハードルが高かった。それゆえ「前段階に中間報告や概略を報告する場があれば」、という声に応えたのが機関誌『ほうげん』であり、その場を提供するのが大きな役割であった。

1995年に発行された同誌第16号にも中尾教授が次のように語っている。「『ほうげん』の研究報告は、自ら足をはこび身体で学んだことの、活きた報告である。おそらくすべての会員諸兄姉は、調査に赴き、そしてその結果報告をまとめるときの、楽しさ、辛さを、いま甘く、そしてほろ苦い思いで噛みしめられておられるのではないかと思います。その思いでつくられた調査報告であるからきわめて実証的であり、後日貴重な資料となることは疑いない。」

『ほうげん』創刊号の目次(個人名省略)は以下の通りである。

『ほうげん』創刊号(1976.3.27) 目次
発刊の辞／会長 「ほうげん」によせて／西南学院大学教授 発刊によせて／初代会長
◇特別寄稿 法社会学難惑／西南学院大学教授 法社会学の西南学派樹立を望む／早稲田大学教授 法社会学調査について／東京大学教授 法社会学の楽しみ ― 共同風呂と入会権／島根大学教授
◇調査のあしあと はじめに 本戸寄留制度と共有林 ― 長崎県対馬 共有林と合名会社 ― 佐賀県富士町 財産区と入会権 ― 大分県九重町 郷山と隠居 ― 長崎県五島 山村と村内法 ― 宮崎県五ヶ瀬町 屋久島憲法と共有林 ― 鹿児島県屋久島 あま漁業と家族関係 ― 長崎県芦辺町 海女漁村における婚姻慣行 ― 山口県油谷町 地域開発と農地の流動 ― 佐賀県基山町 農家相続調査報告要旨 調査の目的と方法 山口県油谷町 熊本県泗水町 福岡県古賀町
◇職場から 裁判所に入って 山村の悩み カネミ油症事件 開拓地をめぐる紛争と行政 「フモト」 実務にたずさわって
◇思い出 ◇調査の経緯 私にとっての調査 大浦海女社会を見て ◇初めての印象 ◇くだ欄 ◇調査記録 ◇編集後記



ほうげん会から寄贈を受けた機関誌

このように福岡県はもとより、奄美や対馬など九州各県や広島、山口、高知に及ぶ遠方までフィールドワークに出かけ、聞きとり調査を行っているが、その調査の課題は、入会林野と村落、農家存続漁村と家族、農地と開発等に大きく分けられる。一般に調査対象が農山漁村となっているが、これは比較的調査に取り組みやすい課題だったため、公害問題や環境問題、都市家族の問題等などは、今後、研究しなければならない問題であると中尾教授も指摘している。

調査は、「共同体的関係が最近まで存在し、その解体過程にあるところ」、また、「現在紛争その他諸矛盾を生じ法的解決を求められているところ」、が対象となる。しかし、調査には、何を置いても現地の方々の協力が必要であり、また、地理的事情も考慮しなければならないところもあって、その意味では調査しやすい地域が対象地となることは当然と言える。

◇『ほうげん』に込められた意味

「ほうげん」には、「法源」(法や法的決定の根拠となりうる規範をさし、究極的法源として、神意や民族精神があげられることもあるが、通常は裁判や行政的決定の根拠となりうる法形式をいう)や「放言」(肩を張った難しい議論だけでなく、今当面している身近な問題や取り組みたい課題を自由に発言する)、「方言」(思ったことを自由に、気楽にその土地のことばで言い合う)という意味が込められており、機関誌の名称に取り上げられたという。

機関誌『ほうげん』は、1976年に発行されて以来、中尾教授が定年退職された1995年の16号をもってひとまず終刊となった。4年の時を経て1999年に『ほうげん復刊』として再出発しているが、同誌は、2014年に中尾教授が逝去されたのを機に終刊している。その後、「ほうげん会」会員を対象に『ほうげんかわら版』を発行し、9号を数えているが、同誌は中尾教授が他界されたこともあって、学術雑誌的な内容から、会員間のコミュニケーションを活発化させようという色合いが濃い編集になっている。

これまで学院史資料センターにもゼミOB・OG会の機関誌、会報等がいくつか寄せられたが、執筆者に在學生を含め、学術研究的な性格をもったものは『ほうげん』が顕著である。事務局の中野さんは「同期、先輩、後輩など法律を学んだ仲間や法律を仕事としている関係者などを結んでくださった中尾先生に感謝しています。先生のご恩や教え、思い出は忘れがたく、『ほうげん会』も50年を越え、先生のご家族との交流も続いていることが支えです。」と同誌が長く続く秘訣を語ってくださった。

中尾教授の追悼集『それぞれの心の接点』(2015年11月29日発行、中尾英俊先生追悼集編集委員会編)によれば、先生は生涯に、単著、共著は56冊、雑誌への寄稿が351本と非常に多くの著書や原稿を執筆されている。その傍ら、60歳を過ぎてから韓国語や中国語を学ぶという並外れた知識欲に加え、博多弁や博多にわかをこよなく愛する一面があることも中尾教授の魅力であろう。『ほうげん』の精神が、いつまでも続いていくことを願ってやまない。